The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	乾燥弱毒生おたふくかぜワクチン
Author(s)	高久, 慶典
Citation	makoto. 1980, 30, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86107
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

乾燥弱毒生おたふくかぜワクチン

阪大微生物病研究会
学術部長　高久慶典

ムンプス（流行性耳下腺炎・おたふくかぜ）は発熱をともなって耳下腺の腫脹と圧痛をもった小児の急性伝染病です。春から初夏にかけての流行期には幼稚園や小学校で激しい伝染を起し、一時学級閉鎖されることも稀ではありません。しばしば髄膜炎または膵臓炎を併発して重篤になる場合もあり、そして思春期になってから罹患すると男子では睾丸炎、女子では卵巣炎を起こす恐れがありこれが原因となって不妊症になることがあります。このためワクチンの実用化が叫ばれておりました。

ワクチン開発の経過

おたふくかぜワクチンのほぼ完成品と見られるものができたのは麻しんワクチンと同じ一九六〇年代であって、それも麻しんワクチン研究グループと全く同じ米国のエンダース博士、ソ連スモロデインツエフ博士そして阪大微研奥野博士らの研究グループでした。米国ではすでに一九六七年から麻しん・風しんとの三種混合ワクチンによって実用化されており、ソ連でも大量に使用されています。

ところで日本では昭和四十三年にワクチンがほぼ完成していましたので文部省、厚生省より研究費が出て研究班がつくられ、三年間にわたり検討されたところ副反応が少なく、かつ効果が優れていることを確めました。そこで昭和四十七年からは実用化のためにムンプスワクチン研究会がつくられ安全性と有効性について試験されました。このようにして試験されたワクチンは、いよいよ「乾燥弱毒生おたふくかぜワクチン」として中央薬事審議会で製造が許可になり、今秋には市販されるはこびとなっております。

表一　微研において昭和42～48年にムンプスワクチンを接種した者の昭和51年までの罹患調査

昭和（年）	かからなかった				かかった			不明
	流行なし（流行の有無不明も含む）	流行あり（接触の有無不明を含む）	流行あり 接触あり	計	確実性高いもの	恐らく誤	計	
42	15	9	22	46	1	0	1	0
44	44	29	33	106	0	0	0	1
45	67	45	91	203	4	2	6	2
46	77	74	88	239	3	7	10	1
47	66	47	54	167	2	3	5	0
48	97	65	51	213	1	1	2	3
総計	366	269	339	974	11	13	24	7

（大阪伝染病流行予測調査会報告）

ワクチンの効果と副反応

表は昭和五十一年にワクチン被接種者個人別家族宛通信によって、昭和四十二年から昭和四十八年までの間にワクチンを受けた者のうち罹患調査のできた千余名についてまとめたものです。毎年かなりの流行が見られるにもかかわらず、ワクチン接種後ムンプスに罹患する者が非常に少ないことがうかがえます。特に患児と接触していてもかからないものが多数あることは、すぐれた有効性を示すものであります。そしてまたおたふくかぜワクチンは麻しんワクチン同様免疫が一生続くものと考えられています。

有効性がすぐれていても、副反応が強いものであればワクチンとして失格です。おたふくかぜワクチンを接種した後の臨床反応は発熱率が3％前後で三十七・五℃から三十八・五℃の発熱が殆んどで、しかも持続期間が一日～二日と副反応が非常に少ないワクチンです。そして微研ワクチンは耳下腺腫もなかったことをムンプスワクチン研究会は報告しています。